＜幼稚園教育＞

# 幼児が聞く、話す楽しさや喜びを味わうようになるための援助の工夫

## ── 日常生活の中の遊びを通して ──

豊見城村立豊見城幼稚園教諭　　與那嶺　多喜子

## 目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由…… 1

Ⅱ　研究仮説…… 1

Ⅲ　幼児の聞く、話す力を育てるための構想図…… 2

Ⅳ　研究内容…… 3
　1　一人一人の幼児に聞く、話す力を育てるための基本的な考え方…… 3
　　(1)　言葉の働き（機能）…… 3
　　(2)　言葉の発達…… 3

　2　幼児の聞く、話す力を育てるための援助の工夫…… 4
　　(1)　幼稚園においての望ましい言語環境…… 4
　　(2)　言語環境としての保育者の役割…… 4
　　(3)　言語文化財を通してのかかわり…… 4

　3　遊びの中での幼児に聞く、話す力を育てるための年間指導計画…… 5

Ⅴ　実践事例…… 7
　1　お話作りを通して…… 7
　2　とび箱で遊ぶ…… 8
　3　保育実践…… 9

Ⅵ　研究の成果と今後の課題…… 10
　1　成　果…… 10
　2　今後の課題…… 10

＜幼稚園教育＞

# 幼児が聞く、話す楽しさや喜びを味わうようになるための援助の工夫

## ── 日常生活の中の遊びを通して ──

豊見城村立豊見城幼稚園教諭　　與那嶺　多喜子

## Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼稚園教育要領』の教育の目標(4)に「日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること」と示されている。

さらに、言葉の領域の「ねらい」として次の３点が示されている。

(1)　自分の気持ちを言葉で表現し、伝え合う喜びを味わう。

(2)　人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話そうとする。

(3)　日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、想像力を豊かにする。

人の話を聞いたり話したりする生活は、人間関係を築くうえで最も大切なことであり、幼児期の重要な発達課題といわれている。言葉は人間関係を豊かにするコミュニケーションのひとつとして大切なだけでなく、自分の思いや感動を上手に表現することにより、伝え合う喜びを味わう。また、認識や思考力を育てていくための素地として重要である。言葉が急速に発達する幼児期において、生活の具体的な場面で聞く、話すなどの経験を豊富にしていくことは重要である。そうした経験の積み重ねが言葉の発達を促す。

ところで、これまで聞く話す指導として

(1)　先生や友達の話を静かに聞く。

(2)　遊びに必要な言葉が言える。（ごっこ遊びなど）

(3)　みんなの前で、簡単な言葉で話をする。

（自己紹介、当番のあいさつ、園長先生の名前を言う、遊んだこと）

(4)　考えたこと、感じたことを話す。

(5)　経験したことをみんなの前で話す。（体験画の説明、夏休みにしたこと）

などを中心に指導してきた。

しかし、日々の実践の中で、

(1)　自分の思っていることが、うまく表現できず相手に伝えることができない幼児。

(2)　話し言葉を語尾まで話せない幼児。

(3)　人の前では自信がなさそうに、声が小さくなってしまう幼児。

(4)　順序立てて話すことができない幼児。

(5)　日常のおしゃべりはするが、人の前で話すことになると恥かしがって充分に話すことができなくなってしまう幼児。

(6)　聞かれたことにうまく返答できない幼児。

などが少なからず見られた。そこで、これまでの指導のあり方を反省し、日常生活の中の遊びを通して幼児が身近な環境にかかわって聞く、話す楽しさや喜びを味わうようになるための援助のあり方を探りたいと考え、本テーマを設定した。

## Ⅱ　研究仮説

1　教師が幼児一人一人を把握し受け入れることにより、教師と幼児の信頼関係が築かれ情緒が安定し、いろいろな活動にも意欲をもって取り組むであろう。

2　日常生活の中の遊びを通して、教師が常に幼児の声に耳を傾け、必要な場面に合わせた言葉かけを多くしたり、語りたい意欲を引きだす豊かな体験をさせることにより、幼児は聞くこと、話すことの楽しさや喜びを味わうようになるであろう。

## Ⅲ　幼児の聞く、話す力を育てるための構想図

**幼稚園教育の目標**

(1)　健康、安全で幸福な生活のための基本的な生活習慣・態度を育て、健全な心身の基礎を培うようにすること。
(2)　人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培うようにすること。
(3)　自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること。
(4)　日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること。
(5)　多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにするようにすること。

↓

**領域「言葉」のねらい**

(1)　自分の気持ちを言葉で表現し、伝え合う喜びを味わう。
(2)　人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話そうとする。
(3)　日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ想像力を豊かにする。

↓

**研究テーマ**

幼児が聞く、話す楽しさや喜びを味わうようになるための援助の工夫

↓

**幼児の生活**

- 一人一人の情緒が安定する。
- 教師との信頼関係が築かれる。
- 自ら興味や関心を持って遊ぶ。
- 友達同士の関係の安定。

人的環境
- 教師
- 友達
- グループの友達
- クラス全員
- 全園児
- 家族

物的環境
- 施設、設備
- 自然とのかかわり
- 幼児の発達にあった環境や教材

↓

空間的 ←→ ・応答性のある環境 ←→ 時間的

↓

・意欲を持って継続して遊びを展開する。

↓

健康　人間関係　環境　表現

↓

**幼児の言葉の獲得**

(1)　先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり話したりする。
(2)　したこと、見たこと、聞いたこと、感じたことなどを自分なりに言葉で表現する。
(3)　したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
(4)　人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
(5)　生活の中で必要な言葉が分かり使う。
(6)　親しみをもって日常のあいさつをする。
(7)　生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
(8)　いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
(9)　絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き想像をする楽しさを味わう。
(10)　日常生活に必要な簡単な標識や文字などに関心をもつ。

↓

聞くこと、話すことの楽しさや喜びを味わうことのできる幼児

## Ⅳ　研究内容

### 1　一人一人の幼児に聞く、話す力を育てるための基本的な考え方

#### (1)　言葉の働き（機能）

言葉は「音声または、文字を手段として、思想、感情、意志を表現しまたは理解する、社会共有の記号体系」である。言葉を持ち得る人間を他の動物から分かつもっとも重要な特徴である。

①　知的操作の促進

考えることは特定の意味を示すシンボルの知的操作を含んでいる。映像やイメージによる知的操作とともに、言語による知的操作は思考活動を一層深めていくものである。

②　共有関係の成立

言葉は特定の言語集団のメンバーによって共通に保有されている音声や文字と意味のまとまりである。だから一つの集団では、決まった発話をし、決まった文字をしっかりと覚え、それで正確に相手に自分の意志を伝え、また相対の意志を理解しなければならない。そこに、多者間に共有関係が成立するのである。

③　行動の調整

人は言葉を通して自分に命令を下し、一定の行動を起こし、ある時には言葉に従って行動を仰制したり、何を優先させるべきかを判断し決定している。このように言葉で自己の行動を統制する調整機能を有する。

④　感情への働き

言葉は感情へも働きかける。人間関係をスムーズにさせるためには、言葉の与える影響は大きい。よく考えて発語しなければならない。

#### (2)　言葉の発達

単語の集まりが語彙であり、心身の発達に応じて語彙数が増加してくる。使用語彙数から、理解語彙数が推測できる。一般には

1歳前後……数語から10語くらい
2歳までに……300語前後
3歳までに……およそ1000語
4歳までに……1500語以上
5歳までに……2000語を超える
6歳までに……3000語前後といわれている。

言葉の発達段階の区分は、『子どもと言葉』（岡田明編）によると、（表1）の通り7期に分けることができる。実際には成熟の速度や環境の影響もあり、個人差がある。

表1　子どもの言葉の発達

| | |
|---|---|
| 初語のころまで | ○産声から始まる泣き声に次第に変化がみられる。<br>○生後1カ月前後からクーイングが聞かれ、2カ月前後から喃語が現れる。<br>○人の声と物音との識別は誕生後間もなくからできる。<br>○6カ月ころまでには、特定の人とのコミュニケーションができ、人見知り的行動も現れる。<br>○8カ月近くなると、親しい人の語りかけや慣れた場面での言葉に理解反応がみられる。 |
| 一語発話のころ | ○8、9カ月から1歳半ころまでの間に初語が現れる。<br>○新しい音声や動作をさかんに模倣する。<br>○人とのやりとりを楽しみ、動作による伝達が増える。<br>○象徴機能の芽生えであるフリ表現が始まる。<br>○指さし行動が始まる。 |
| 二語発話のころ | ○1歳半から2歳の間に2語発話が始まる。<br>○助詞の種類がふえる。<br>○幼児語や幼児音が多い。 |
| 2歳前後 | ○「コレナーニ？」とさかんに質問し、語彙数が急増する。<br>○品詞の種類も増え、2歳までには、ほとんどすべての品詞を使う。 |
| 3歳のころ | ○想像遊びがピークに達する。<br>○日常の会話にはほとんど不自由しない。<br>○発音面も安定し、声の大きさの調節ができる。<br>○大人となら電話でやりとりする。子どもどうしのコミュニケーションも言葉でやろうとする。<br>○言葉の使い方の間違いや自分勝手な新語もよくある。<br>○自分の言葉で自分の行動を調整できる。 |
| 4歳から6歳のころ | ○4歳近くなると、過去・現在・未来の一連の出来事を時間的に順序だてて話すことができる。<br>○副詞や形容詞などを使って詳しい話をする。接続詞や接続助詞を使って、事象と事象との関係を表現する。<br>○人の発話や語の意味的理解も進み、言葉を使った生活が定着する。<br>○言葉だけに頼った伝達には限界がある。<br>○4歳を過ぎると構音は上達し、6歳になるころには幼児音はほとんどなくなる。<br>○文字に関心を示し、ひらがなの読み書きを始める。 |
| 6歳以降 | ○言葉による思考が活発になる。<br>○話合いができるようになる。<br>○言葉による行動調整機能も発達する。<br>○文字言語が生活の重要な部分を占めるようになる。 |

## 2　幼児の聞く、話す力を育てるための援助の工夫

幼児期の生活の中心は遊びである。幼児が、遊びの中で興味や関心をもって環境に自発的、意欲的にかかわり、活動を生み出し展開していく。夢中になって遊ぶ中で、友達とのトラブルや葛藤を経験したり、成功感や達成感を味わったりしながら発達に必要な体験を総合的に積み重ねていく。それにより更に発達が促されていく。したがって遊びを通した指導は必然的に総合的になる。幼児が遊びを活発に展開していくこと自体が言葉で生活することにつながってくる。幼児期は幼児が話し言葉の生活を開始し充実させていく時期である。幼児は毎日の生活の中で、人との積極的なかかわりを通して、言葉を獲得し、言葉で思考し、言葉を操って表現し、生活の中で活動を一層深めていく。さらに、幼児が日常生活の中で教師や友達と親しく接しながら、自分たちの感情や意志などを言葉で伝えあう喜びを味わうことにより、表現意欲をかきたてる。また、さまざまなできごとや、絵本や物語などに数多く出会う中で、教師などの言葉の影響を受けながらイメージを豊かなものにし、語彙を増やしていく。従って、よりよき言語環境の構成は大切なことであり、教師自身もよき言語環境になりうるように努めなければならない。

### (1)　幼稚園においての望ましい言語環境

①　生活の中で心を動かし表現したくなるような体験が豊富にもてる環境。

②　言葉をかわす喜びを味わえるような友達や教師の存在。

③　話したり、聞いたりする経験を十分持てる保育カリキュラム。

④　絵本、物語などの文化財が豊富にある言語環境。

### (2)　言語環境としての保育者の役割

①　保育者の声と言葉

- よい聞き手としての働き。
- 理解者、共感者としての働き。
- 言語化、拡充的応答など援助者としての働き。
- 美しい言葉の伝達者、言葉学習のモデルとしての働き。
- 仲間（友達）とのコミュニケーションの仲介者としての働き。
- 言語環境の構成者としての働き。
- 生活の場の雰囲気を作る働き。
- 幼児が自己像を描くための援助者としての働き。
- 行動の指針を示す働き。
- 心を育てる働き。

②　具体的な言葉かけの工夫

- 幼児の自発的な遊びの中で言葉かけを工夫し、言語活動を活性化していく。
- 遊びの中での一人一人の幼児の取り組みの様子をとらえ、そこでの幼児の欲求や興味を深くよみとること。
- 保育者の感情をこめた言葉は幼児の言葉の働きを促す。
- 「○○しましょう」、「○○してはいけません」、「上手ね」、「頑張ってね」などのパターン化した言葉かけはさける。また、「こんなことをして良いことかしら、悪いことかしら」などの勧善懲悪型の処理はしない。

### (3)　言語文化財を通してのかかわり

想像力や創造力、感受性や情操、考える力、理解力、表現力、聞く態度、書き言葉への関心、美しい言葉に対する感覚などは語りかけのみで育つものではない。言語文化財としての絵本などに触れることを通しても幼児の中に心情、態度、意欲が育つ。幼児が観たり、聴いたり、読んだりする文化財には教師が語り聞かせる素話などのほか、絵本、紙芝居、パネルシアターなどの人形劇、テレビ、ラジオ、映画、テープレコーダーなど言語文化財の範囲は広い。

① お話

お話とは、人間が発する一連の意味のある言葉である。絵や道具を使わないので話し手の気持ちが直接表れやすく、幼児への思いを込めて語るならば、話し手によって作り出されるお話の雰囲気の中から、幼児達の安定した情緒や話し手に対する信頼感が育っていく。

ア お話の特徴

- 想像力や情操を養う。
- 思考力を養う。
- 話し手との絆を強める。
- 人の話を聴く基礎が養われる。
- 正しい言葉の習得。
- 特別な教具や教材を必要としない。また、時間や場所の制限がない。

イ お話の選択

- 幼児の発達段階や、その時の興味にあったもの。
- 内容の筋がわかりやすく、起承転結の構成がしっかりしたもの。
- 楽しさや、夢のあるもので共感できるもの。
- 繰り返しのある話やリズミカルな言葉のあるもの。例えば、『三匹の子ぶた』や『桃太郎』

ウ お話をするときの留意点

- 聞き手全員の表情が見えるような配置にし、逆光にならないようにする。
- 正確な発音を心がけ、速くならないように心がける。
- タイミングよく間をとったり、会話の部分はその人の気持ちになって話し、不自然な声色や大げさなゼスチャアはさけ、自然に話す。
- 話の内容をよく把握しておく。

② 絵本

絵本とは、絵で主題を表現している本である。絵本には絵だけのものもあるが、ふつう絵と文の両方が描かれている。

ア 絵本の特徴

- 語彙を豊かにし、言葉で表現する力を育てる。
- 感動する心が育ち、情緒が安定する。
- 想像力を豊かにする。
- 知的な関心を育てたり、満足させたりする。
- 経験を再確認することによって知識や理解を深める。
- 絵本の内容を他の活動で表現しようとする意欲を育てる。
- 文字に関心をもつ。
- 絵本は集団保育の場では、みんなの物として大切に扱うことを知らせる。

イ 絵本を読み聞かせるときの留意点

- ある程度の大きさがあり、絵の鮮明なものを選び、事前に十分読み聞かせの練習をしておく。
- 絵本の持ち方、読み方、ページの開き方などに配慮をする。
- 読み終えた後は感動を大切にし、イメージを発展させるようにしたり、いつでも幼児が自由に見られるようにして、保育室に備えておく。年長児では感想を話し合ったり、意見を述べ合う機会を作ってもよい。

**3 遊びの中での幼児に聞く、話す力を育てるための年間指導計画**

遊びの中で聞く、話すことを見通しをもって指導することは大切である。そのために、幼児の遊びの中で聞く、話す力を育てるための年間指導計画を作成した。（表２）。

表2　遊びの中での幼児に聞く・話す力を育てるための年間指導計画

| 期 | | 一　期（4月 ～ 7月） | 二　期（9月 ～ 12月） | 三　期（1月 ～ 3月） |
|---|---|---|---|---|
| | | 日常会話としての言語時期 | 思考する言語時期 | 言葉を自由に使いこなす時期 |
| 幼児の姿 | | ◦絵本、紙芝居、素話などに興味をもち、喜んで聞こうとする姿が見られる。<br>◦楽しかったことや困ったことを話そうとする。 | ◦自分の経験したことや考えた事を話したり、友達の考えを受け入れて遊ぶ姿が見られる。<br>◦文字や数に興味や関心が出てくる。 | ◦文字や数に興味、関心が高まり、積極的に遊びの中にも取り入れながら遊ぶ姿が見られる。 |
| ねらい | 聞く態度 | ◦先生や友達の話を喜んで聞く。<br>◦話し相手の顔を見て話を聞く。 | ◦人の話を注意して静かに聞く。<br>◦先生や友達の話しを興味、関心をもって聞く。<br>◦要求を言葉で表現したり、分からないことを自分で聞く。 | ◦人の話しをしっかり聞いて理解しようとする。<br>◦話の展開を予想しながら聞く。 |
| | 話す能力 | ◦遊びの中で考えた事や思ったことを自分なりに表現する。<br>◦みんなの前で考えた事などを話す。 | ◦自分の思っている事をはっきり話す。<br>◦相手に分かるようにしっかりと話そうとする。<br>◦一つの話題をみんなで話し合う。 | ◦自分なりの表現で相手に分かるように話す。<br>◦場に応じていろいろな言葉があることを知る。 |
| 内容 | | ◦喜んで登園し、先生と話したりし、親しみを持つ。<br>◦絵本や紙芝居に親しみを持ち、見たり、聞いたりする。<br>◦身近なできごとを先生や友達に話すことを喜ぶ。<br>◦自分が感じたこと、考えたことを友達に伝えたり、話を聞いたり、会話を楽しむ。<br>◦みんなの前であいさつをする。 | ◦絵本や素話等に親しみ、自分なりのイメージを広げる楽しさを味わう。<br>◦気の合う友達と考えを伝え合いながら遊びを進めていく。<br>◦自分のしたいこと、してほしいことを意識し、語尾まで使う。 | ◦絵本や物語などに親しみ、興味をもって見たり、聞いたりして自分なりにイメージを豊かにする。<br>◦日常生活に必要な文字や数に関心をもつ。<br>◦経験したことを絵に描いたりして、言葉で表現することを喜ぶ。 |
| 教師の援助 | | ◦幼児の話しをていねいに聞くようにする。<br>◦幼児一人一人の安定を図るため絵本の読み聞かせをする。<br>◦幼児一人一人に親しみをもって話しかけるようにする。<br>◦話しを聞く時の約束を一緒に話し合う。<br>・立ち上がったりしないで、人の話を注意して聞く。<br>・話したいことがあっても、相手の話しが終わるまで待つ。 | ◦自分達でつくった物で遊ぶことによって楽しく会話ができるようにする。<br>◦媒介者を通して自分の思ったこと、考えたことを表現できるようにする。<br>◦幼児に対する話しの内容や話し方を工夫する。<br>◦幼児のしたいこと、してほしいことを語尾まで言えるようにさせる。<br>◦言葉や文字、数に関する教材を準備する。 | ◦幼児同士の話し合いや遊びを大事にし、力を合わせてやりとげた喜びを体験させたい。<br>◦小学校1年生と交流して「一年生になったらこんな楽しいことが./」という手紙などがもらえるように小学校と連携する。 |

## V　実践事例

### 1　お話作りを通して　　平成７年12月12日

ねらい　　ストーリーを作ることによって聞く、話す楽しさを味わわせる。

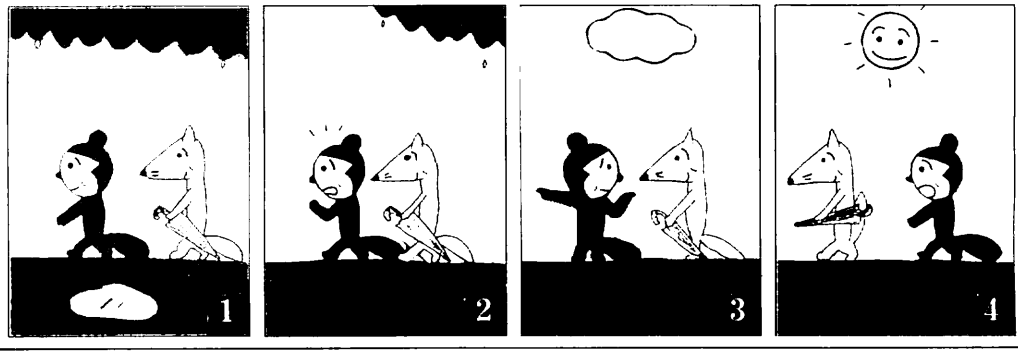
内　容　　絵を見て、お友達や保育者とお話作りをする。

◉文字なし絵本　『おはなしなあに２』……きつねとたぬき

〈あらすじ〉

きつねが先を歩いていたたぬきのしっぽを踏みつける。そこでたぬきがきつねに今度は先に歩くように言う。ところがきつねはかさでしっぽを踏まれないようにしてしまう。空模様の変化（雨上がり→お日様）もみられた。

（Ｔ男）　「きつね君とたぬき君が散歩していました。雨が降ってきました。雨がやんでいて、きつね君がたぬき君のしっぽを踏みました。たぬきくんは“いたい”と言いました。たぬき君は“きつね君前にいって”と言った。おしっぽを今度はたぬきくんがわざと踏もうと思ったけど、きつね君はかさでしっぽを自分の背中にくっつけました。」

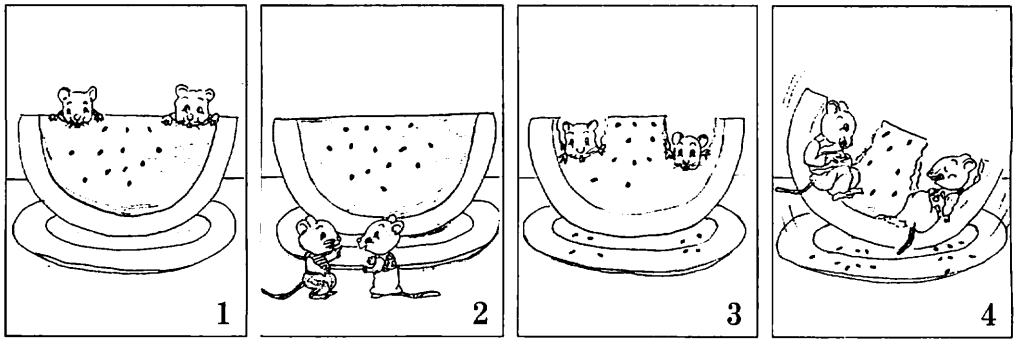



◉文字なし絵本　『おはなしなあに２』……２匹のねずみとスイカ

〈あらすじ〉

２匹のねずみがスイカを食べていって、やがてそれをシーソーにして遊ぶ。

（Ｓ子）　「スイカがありました。ねずみが二人きました。すると“僕が食べる”と言いました。二人で食べました。腹いっぱいになりました。少し残して、ベットにしました。」




考察

- 自分のイメージをもって話し、想像力を豊かにし、創る喜びを味わっていた。
- 心を動かし、語りたくなるような体験をと考え、文字なし絵本を題材に選んだ。
- 他の幼児も興味を示して喜んで聞いていた。
- 語彙の豊かさは個人差がある。豊かな子はストーリーに膨らみがみられる。
- 家庭でもよく絵本にかかわっている子は話し言葉や語彙が豊かである。

2　とび箱で遊ぶ

ねらい　・友達ととび箱で遊ぶ中で自分の考えたことを話したり、相手の話しを聞いたりする喜びを味わう。

内　容　・身体を十分に動かしてとび箱で遊ぶ。
・自分の思いや考えたことを自分なりに表現し、伝え合う。

| 時の流れ | 幼児の活動する姿 | 教師の援助 |
|---|---|---|
| 6月 | ・とび箱が好きな幼児たちが教師の見守っている中、とび箱をして遊んでいる。クラス全員がいやがらずに挑戦することができる。（とび箱は、遊戯室に準備してある。） | ・一人一人の幼児が遊びの中から心を動かして話したくなる環境を設定する。 |
| 7／6<br>10：15 | ・K男「とび箱していい？」と待ちきれないようす。<br>・K男、E男、A子3人で、とび箱5段を横にして（遊戯室中央側）セットした。これまでの遊びの中で、組み立て方は共有化されている。そこに16人の幼児も加わり、とび始める。<br>・Y子「R子頑張って」と声援をしながら、もう一つのとび箱を縦5段にして遊んでいる。しばらくして他の幼児たちも両方のとび箱を交互にとんでいる。 | ・「やっていいよ。後で見にいくから頑張っていてね。」<br>・一人一人の動きを見守りながら、感情をこめた具体的な評価（ほめる）をしてあげる。 |
| 11：00 | ・片付けをする。 | ・片付けを進んでやっている姿勢をほめてあげる。 |
| 7／7<br>9：20<br>〜<br>9：50 | ・R男、M男、S子、K男4人で2つのとび箱を横5段にしてとび始める。同じ5段でも少し高さが違うことに気付き「ここ、でーじなかんたん」と言って低いほうのとび箱をとび始める。そこへA子、Y子、G男も加わる。<br>・R男「ジャンプしながらとぶんだよ」とまだとべないA子に教える。 | ・「そうよね。いいこと考えたね。」と何度も挑戦しているA子の姿を認め励ます。 |
| 7／10<br>8：37 | ・とび箱の大好きなR男が横5段にセットする。そこへK男、H男も加わる。段の高さをいろいろかえて挑戦している。高くなるにつれて挑戦する態度も真剣になる。<br>・そのうちにとび箱をバラバラにして遊ぶ。<br>・R男「船だよ」と上段のとび箱をひっくり返して遊ぶ。<br>・K男「ポッポー」ととび箱の枠を汽車に見立てて遊び始めた。数名の幼児もその遊びに加わる。<br>・しばらく船、汽車で遊んでいたK君、A子、H男の3人がまた、とび箱縦4段をとびはじめた。<br>・H男「やったー。できたぞー。」とはじめてとべた喜びを両手を上げて表している。<br>・周りの子も「よかったなー」と拍手を送る。 | ・教師も汽車遊びに加わり「次は幼稚園です。止まります。」と遊びを盛り上げる。<br>・「すごい！よかったね。また見たいなー。」と教師も幼児と一緒に共感する。 |

考察　○自分達でとび箱遊びを進めながら、「○段にしよう」、「船にしよう」などと具体的な遊びの方向性を見いだし、とび箱遊びを満喫していた。遊びの中で自分の考えを話したり、友達の考えを聞いたりする姿が見られ、言葉をかわす喜びを味わえた。また、とべた子に「よかったなー」と感嘆し、喜びを共有する姿も見られた。

3　保育実践　指導案　平成７年12月20日（水）　　にじ組　男児12名・女児15名　計27名

| | |
|---|---|
| 幼児の姿 | ・生活発表会を終え、頑張ってきた充実感とクラス全体で創りあげたという満足感が見られる。<br>・戸外ではドッジボールの楽しさがわかり、自分たちでルールを相談して決めて遊びを進めている。<br>・室内では友達と一緒に文字のない絵本を見たり、かるた取り、スタンプ遊び等で仲良く遊んでいる。また音楽を流しリズムに合わせて歌ったり踊ったりする姿も見られる。 |

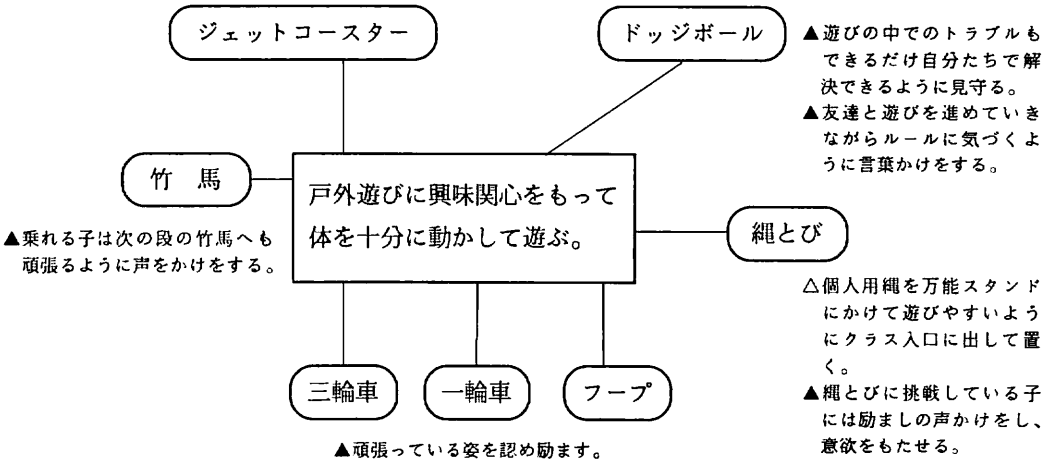
| | | | |
|---|---|---|---|
| ねらい | ・友達と一緒に協力して思ったことを話したり、友達の考えを聞いたりして遊びを楽しむ。<br>・自分の思っていることを話し、イメージを広げる。 | 内容 | ・戸外遊びに興味関心をもって体を十分に動かして遊ぶ。<br>・好きな友達と一緒に相談しながら遊ぶ。<br>・絵本に親しみ自分なりのイメージを広げる。 |

一日の流れ　□ 内容　◯ 予想される活動　▲言語環境としての教師の援助　△その他の教師の援助

8：15登園する
・あいさつする
・出席シールを貼る
・持ち物の始末
・花、野菜への水やりをする

友達と一緒に楽しく遊ぶ

▲言葉かけをしながらジェットコースター遊びが楽しくなるようにすべり方を工夫する。



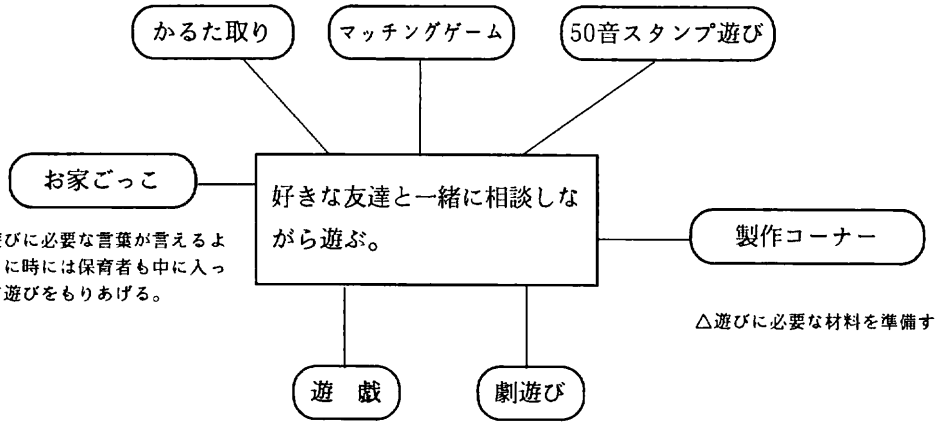

▲遊びの中でのトラブルもできるだけ自分たちで解決できるように見守る。
▲友達と遊びを進めていきながらルールに気づくように言葉かけをする。

▲乗れる子は次の段の竹馬へも頑張るように声をかけをする。

△個人用縄を万能スタンドにかけて遊びやすいようにクラス入口に出して置く。
▲縄とびに挑戦している子には励ましの声かけをし、意欲をもたせる。

▲頑張っている姿を認め励ます。

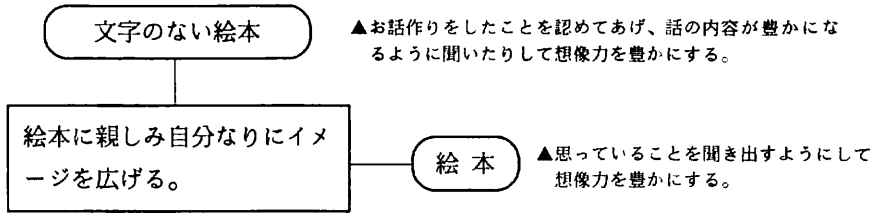
▲遊びを認めながら遊ぶ中で言葉や文字、数に興味をもてるようにさせたい。




▲遊びに必要な言葉が言えるように時には保育者も中に入って遊びをもりあげる。

△遊びに必要な材料を準備する。

▲表現したい気持ちを認めて励ます。




| | |
|---|---|
| 10：15片付けをする<br>集合をする | ▲遊んだ後の片付けができるよう言葉かけをし、手洗いを促す。<br>○集合をし、絵本『ふしぎなくも』を見る。<br>▲ページごとに幼児との言葉のやりとりをしながらめくっていく。 |
| 11：00おやつをする<br>帰りの準備をする | ○おやつをする。<br>○今日どのような遊びをしたか話す。<br>▲遊びの中で楽しかったことや、どうしてほしいか等を話し合う。<br>▲自分の思ったことをみんなの前で話しができるように励ます。<br>○明日は何をして遊びたいかを話す。<br>▲今日の遊びを認め、明日への期待を持てるような声かけをする。 |
| 12：30降園する | ○降園する。　▲安全に気をつけるよう声かけをして帰す。 |

考　察

○戸外遊びで十分な体験を積んだ幼児から、「いつも練習しているから、ボール投げられるよ。」、「少し体を前に倒していくと、竹馬が上手に乗れるんだよ」等の言葉が聞け、遊びの中から豊かな発語が自然に促されてきた。

○友達とかかわって楽しく遊んでいる場面で、自由に自分の意志や感情を言葉で伝え合う意欲を育てることができた。

○幼児からいろいろな言葉を引き出したいとの思いから、絵を見る楽しさを満喫させ、文字を読まずに視覚にうったえる方法を取った。その結果、いろいろ想像をし、「雲がおもしろい」「雲に乗りたい」「雲の中にもぐりたい」「雲に乗って街へ行きたい」「雲に乗って神様の所へ行きたい」「雲に乗って子どもの国へ行く」「雲のお家をみんなで協力して作った」などのいろいろな言葉を聞くことができた。つまり、生活の中で友達の言葉を聞き、多くの言葉を発する環境を教師が設定することで、語彙数が増え、言葉で生活する活動を深めていくことにつながった。

## Ⅵ　研究の成果と今後の課題

### 1　成　果

(1)　幼児一人一人の発達の特性に応じた指導を行うことによって、受け入れることの大切さを確認することができた。

(2)　幼児の必要感に応じて適切な場、適時に教師の言葉による働きかけが大切であることを再確認した。

(3)　環境にかかわり十分に活動に取り組ませ、語りたい意欲を引き出す遊びを展開させる事の大切さがわかった。

(4)　幼稚園教育の基本が「環境を通して行う教育」であるから、そのためには言語活動が活性化するための環境づくりが重要であることを確認した。

### 2　今後の課題

(1)　語りたい意欲を引き出すための、年間指導計画のより効果的な活用。

(2)　幼児の発達に適した絵本や物語などの精選。

(3)　パネルシアター等を使った言語活動活性化のための教材研究。

〈主な参考文献〉


| | | | |
|---|---|---|---|
| 文部省 | 『幼稚園教育指導書増補版』 | フレーベル館 | 1989年 |
| 岡田明　編 | 『子どもと言葉』 | 萌文書林 | 1993年 |
| 無藤隆・髙杉自子　編 | 『保育内容言葉』 | ミネルヴァ書房 | 1990年 |